

【ポスター発表】

小学校教師は職務上のどのようなことに満足感を得て、
どのような援助を受けることへ抵抗があるのか

—情緒的消耗感との関連—

○ 佐藤 広崇 (東京福祉大学・008192)

キーワード3つ: 教師の満足感, バーンアウト, スクールソーシャルワーカー

1. 研究目的

教育現場において、教師のバーンアウトは大きな問題であり、文部科学省(2012)によってもメンタルヘルスの問題が指摘されている。従来から教師の悩みやバーンアウトに関する研究も盛んに行われている(田中,2007; 都丸・庄司,2005; 八並・新井,2001 など多数)。

確かに、教師を取り巻く環境は厳しく、多忙かつ多様な職務をこなすなかで、疲弊している者も多い(例えば奥野,2013 など)。しかし、一方で教師は大きなやりがいを得られる仕事でもあり、特に児童生徒と関わりが良好な時に満足感などを感じるとされている(Lortie,1975; Nias,1989)。しかし、教職のポジティブな側面に焦点を当てたバーンアウトの研究や教師援助研究はほとんどなされていない。そこで、本研究では、小学校教師を対象として、教師が職務上のどのようなことに満足感を得ているか明らかにするとともに、スクールソーシャルワーカーなどからどのような援助を受けることに抵抗があるのか、バーンアウトの中核概念である情緒的消耗感との関連から検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

調査時期は2015年11月。調査対象は首都圏と東北地方の2つの県に勤務する440名。297名から回答が得られ(回収率67.5%)、その中から児童の教育に直接関わらない職員1名を除いた296名を対象とした。年齢の平均は47.7歳($SD=8.43$)、勤務年数の平均は23.6年($SD=9.33$)であった。調査内容は、①職務上の満足感(日常の職務内容、対人関係、勤務環境、教師の特性・適性の4領域31項目。5.あてはまる～1.あてはまらない)②情緒的消耗感(5項目。4.あてはまる～1.あてはまらない)。③どのような援助を受けることへ抵抗があるか(児童への援助、保護者や家庭への援助、学校管理やメンタルヘルスに関する援助、特別な配慮を要する児童への援助の4領域36項目。4.抵抗がある～1.抵抗はない)。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針にもとづき、個人が特定されないことや質問紙の管理方法、保存期間、得られたデータの取り扱い、回収方法などを書面にて説明し同意を得た。また、各学校長から回答内容が職務評価などに影響しない旨の説明をしてもらった。

4. 研究結果

職務満足について、値が高かった上位5項目は「私は、子どもと接することが楽しい($M=4.50, SD=.62$)」、「子どもはおもしろい($M=4.49, SD=.67$)」、「未来ある子どもたちを育

てることは幸せだ ($M=4.34, SD=.72$)」, 「私は, 授業を行うことが楽しい ($M=4.27, SD=.70$)」, 「私は, 職員会議やその他教員同士の打ち合わせ等で情報交換ができています ($M=4.04, SD=.64$)」であり, 児童と接することを中心に大きなやりがいを得ていることが示唆された。満足感が低かった 5 項目は, 「私は, 給与や福利厚生におおた満足している ($M=2.94, SD=1.03$)」, 「私は, 教育行政や教育制度に関して納得している ($M=3.09, SD=.84$)」, 「私は, クラス運営が上手である ($M=3.31, SD=.80$)」, 「私は, 部活動やクラブ活動の指導をすることが楽しい ($M=3.34, SD=1.11$)」, 「私は, 勤務とプライベートの時間をバランス良くとっている ($M=3.40, SD=1.09$)」であり, 給与面や部活動の負担, ワークライフバランスの問題など, 昨今の教師の労働環境の問題が浮き彫りとなる結果であった。特に, 消耗感が高い教師群は給与や教育制度, プライベートの時間などの満足感が顕著に低かった。一方, 消耗感の低い群は子どもと接することへの喜びが大きいことに加え, 教師であることに誇りをもち, 教師生活を有意義に捉えている可能性が示唆された。

援助への抵抗感については, 上位の項目として, 「援助者が私に代わってクラス運営を行うこと ($M=2.74, SD=.96$)」, 「援助者が私に代わって家庭訪問を行うこと ($M=2.30, SD=.93$)」, 「教員評価について, 援助者が助言すること ($M=2.14, SD=.97$)」などが挙げられるが, 本研究で設定したすべての項目で評定値が 3 (やや抵抗がある) を下回っており, 予想に反して全体的に平均値が低い結果となった。

次に, 職務満足 4 領域および援助への抵抗 4 領域それぞれについて下位尺度得点を算出し, 情緒的消耗感との関連を検討した。その結果, 職務満足 4 領域すべてとの間に $-0.38 \sim -0.49$ の有意な相関が認められた。一方, 援助への抵抗 4 領域と情緒的消耗感との間には関連性が示されなかった。そこで, 満足感が情緒的消耗感に与える影響を分析するため, 職務満足 4 領域を独立変数, 情緒的消耗感を従属変数とする重回帰分析を行ったところ, 日常の職務内容および勤務環境のふたつの領域が消耗感に有意な負の影響を与えていた。

5. 考察

まず, 本研究において教師の主観的な意識である満足感を数量的に検討できたことは意義があるといえる。これらの意識についてはこれまでインタビュー調査やフィールドワークによる質的な検討が多く行われてきたが, 今回, 子どもを指導をすることや授業を行うことへの高い満足感, 教職のやりがいや誇りなどを実証することができた。

次に, 援助への抵抗については, 予想に反して全体的に低い値となり, 情緒的消耗感との関連も見出されなかった。他者からの援助に抵抗を感じることは, 仕事の抱え込みすぎや職場での孤立を生みやすく, 消耗感との強い関連が予想されたが, 今回, 関連性が認められなかった。この点については, 今後詳細な検討が必要である。

また, 授業や校務分掌, 学校行事などの日常職務への満足感, および, 研修の機会や学校の雰囲気, 給与, 教育行政など勤務環境への満足感が, 消耗感を低減する可能性も示唆された。